入選

緑色の妄想

伊藤　摩利子　茨城県つくば市　七十四歳

後ろから誰かに呼びとめられたような気がしたのは、キンモクセイの声でした。振り向くと、ここですよ、と小さなオレンジ色の花たちが手を振っています。これでがぜんやる気が出てしまい、手あたり次第花や葉っぱを嗅ぎまわるのを老いの楽しみと決めました。お金はかからないし、歩数もかせげて、ボケ防止にもなりそう。姿形の芸の細かさもさることながら、匂いも百花繚乱の役者ぞろいなのにも、恐れ入るばかり。バナナ味のカラタネオガタマはおしゃれなフルーツパーラー、名前にひと工夫ほしかったよねとクサギを慰め、他人の空においってあるんだね、とゴマキのゴマ風味をたたえ、ハマゴウの下で浜辺の昼寝の夢を見る。目をつぶって鼻をひくひく、妄想ばあさんは、匂いの精との出会いにうつつをぬかす羽目になりました。「変てこ植物展」でラフレシアの臭いを、実物ではなく再現バージョンですが、おっかなびっくり嗅いでみました。ぶっとい蛇が出てきそうなジャングルの空気感はさすがで、匂いを拡大できるルーペがあったら、鼻がほんとうに曲がるか、試せたかもしれません。

植物にしてみれば、人間がうっとりしようが、鼻をつまもうが、しったこっちゃない。ひたすら種の保存に励み、人に媚びたり、嫌われたりする理由はなかったはずなのに、緑が深く人の心を動かすのは他生の縁、それとも遠く時間を遡ると同じ祖先にたどりつくから、わくわく妄想がとまりません。